

人生の勝利に向けて、未来への誓い

栃木学習センター

福田 一夫

放送大学で学び始めてから今年で 11 年がたった。この 11 年色々なことを経験した。未来はその延長線上にある。そんなこと当然である。しかし、精神を病んだことがあるものにはそう簡単ではない。自分の都合で勝手な解釈をして、物事を出鱈目な方向で語ろうとする。連続と非連続の交差する矛盾の中で、自己嫌悪に陥りかねない。主治医の先生は、すべての事象の独立性を論してくれた。混乱と捻じ曲げられた物語が、整然と整理されていく瞬間を経験した。病んだ精神が治癒に向かっていった。そして今を生きている。

そう、私は自由になった。せせこましい職場の風から解放されていた。生活の糧など当てもない。けれど心の中は、そよ風が吹いていた。訳の解らない何かにとらわれて生きるなら、命は輝かない。少々抽象的ではあるが、具体的に述べる勇気までは心が許していない。私は、何に怯え何に立ち向かい故に傷ついたのか思い浮かべている。

もう駄目かと思うことが度々あった。このままでは笑って死ねないと思う日々もあった。揺さぶらなければ、見え据えた常識も変わりはないという現実だけが、推進力となっていった。あの日に戻れるなら、もっと器用な人生を選択していただろう。不器用な人生の選択の果てに、先の見えない不安に喘いでいる。

物事をすべて肯定的に受け止める習慣は、今に始まったわけではない。この 10 年の試行錯誤から生まれた。人生は誰にも冷たいものである。思い通りにならない。何も確かなものはない。不確かな不確実性の中を生きている。然もすれば、自由も意味あるものに見える。だから人生は楽しい。だから人生は遣り甲斐に満ちている。すべて思い通りになるなんてつまらないことはない。自分の努力によって変えていける明日がそこにはある。

本当に努力は人を裏切らないのだろうか。どうやら現実は違うらしいことも我々は知ってしまった。新自由主義転換後の世界では、報われず裏切られ何一つ誇りも見いだせない憂鬱が支配的となっていった。人々は真面目に精進する価値に背を向け始めた。人間の素直さが軽視され、うまく振る舞うことで財を成し、人なっこさが滑稽に映る社会の到来に、人間の愚かさだけが目に染みる。

そんな毎日に背を向けてみる。ふとすると、希望の眼差しが注がれるグラウンドに立っている自己に気付く。明日もここで生きていくんだ。一瞬一瞬を真剣に生きよう。思い返すうちに、夜が明けていく。今日もお天気だ。変わり映えの無い平穏な毎日が流れている。本当の幸せってそんなものだろう。移り行く季節の中で、確実に一歩ずつ歩んでいける実感こそ、私のほしかった充実感である。結果を出しつつ背伸びができる自由。そんな心のゆとりが欲しい。

こんな他愛もない言葉遊びに明け暮れていると、夜明けが窓際に攻め寄せてきた。小鳥のさえずりとともに、どうにか変えられるであろうはずの一日がやってくる。俺を見ろ、

俺に続けとばかりにいきがってみては、言葉に酔う。言葉に酔うからこそ気持ちがいい。気持ちがいいから、減らず口は止まない。利口な生き方ではないかもしれない。誰も悪くはない。誰のせいでもない。もちろん自分も悪くはないし、自分のせいでもない。人生は仕方なく壊れていくこともある。

輝ける未来ばかりではない。沈む夕日に涙する日もある。弱いものが集まって傷をなめ合う夜、敗れ去った者たちの遠吠えが聞こえる。老兵は死なず、剣を収めて家路をたどる。人それぞれ精一杯生きた証をもって、落日を迎える。問題は、何を為し得たかではない。何に向き合ったかである。向き合い方が真剣であればあるほど、人生は健気になる。笑って死ぬ瞬間、人生の勝利は訪れるのだろう。そう、あなたのように強く生きよう。

間もなく母の7回忌はやってくる。正真正銘真実に生きた母に恥じない生き方をしよう。そう心がけている。やりたい放題に真実を生きよう。やっとそういう身分に着けたのだから。

時代のせいでもなく、自分のせいでもなく、浮き草のふるまいを忘れずに、素直に生きる生き方こそ、現代人がとうに忘れてしまった幸せを取り戻せるのであろう。未来は形作るもの。勝ち取るものでもある。たった一度の人生だもの自分の可能性に賭けて生きよう。心と懐が寒い時こそ胸を張って生きよう。きっと良いことがあると信じよう。信じることから始めよう。肯定的な節回しは、病の中心症状と区別がつきにくい。不都合な現実だが乗り越えて生きていこうと決めている。私には叶えたい野心があるのだから。これからも放送大学で学び続けていくことだろう。勉強に終わりはないと信じて.....